

不安定性を伴う腰部脊椎管狭窄症に対して 内視鏡下片側進入両側除圧を行った1例 A case of LCS with instability treated by MEL

古閑 比佐志、原国 毅

【目的】不安定性を伴う腰部脊椎管狭窄症で、不安定性の程度にもよると思われるが、除圧単独でも症状改善は得られる。治療効果が得られるかは、個々の症例での十分な検討が必要であり、かつ術後も十分な経過観察が必要である。今回、内視鏡下腰椎椎弓切除で、症状改善が得れた一例を経験したので報告する。

【症例】56歳、男性。草刈り機をかついで仕事を行っている時、左下肢痛が出現され、徐々に症状が悪化増強された。安静時、痛みなし。前屈、中腰で、腰痛悪化を認め、下肢痛が最も困っている症状であった。腰椎MRIで、L4/5で狭窄を認め、L4/5椎間関節に水腫を認め、L4前方すべり（Meyerding Grade I）を認めた。

【手術】内視鏡下に左片側進入両側除圧を施行。術後、症状は改善された。

【結語】低侵襲にておこなえる内視鏡下除圧は、軟部組織を含めた後方要素を極力温存できる有効な治療である。長期followが必要であるが、短期的には患者満足が十分に得られる。